

# エスノグラフィと生成変化

## ——宮本常一の民族誌的实践を事例としたそのエイジェンシーに関する分析

*Ethnography and the “Becoming”: An analysis on Miyamoto Tsuneichi’s Ethnographic Practice as a Case Study of its Agency*

門田岳久 [立教大学観光学部・准教授]

KADOTA, Takehisa

**Abstract:** This paper addresses the question of how Anthropological ethnography works with society by analyzing the ethnographic practices of Japanese ethnologist Tsuneichi Miyamoto(1907-81) and his students on a remote island, and our own case study of a similar project using their legacy as material. Specifically, I examined two aspects of the agency of ethnography. The first is about how social design and future projections based on ethnographic research had an impact on local communities, and the second is about how the materiality of ethnography (especially the fact that it is made of paper, a portable material) attracted local people and brought about self-reflection in their everyday lives. Ethnography as a material is not just an object, but as a subject, which describes a project, forms the next project, disturbs the relationship between us (the ethnographers) and them (the written), and brings about changes on both sides.

**Keywords:** 民族誌(Ethnography), マテリアリティ(Materiality), ソーシャルデザイン(Social Design), デザインサーヴェイ(Design Survey), 社会調査(Social Research)

I はじめに：エスノグラフィのプロセス

II 予測のズレ：宮本常一の場合

1. 地域介入と未来予測
2. エスノグラフィとしてのフィールド写真
3. 再帰的地域社会

III エスノグラフィの物質性

1. 調査報告書
2. 武蔵美の民家調査
3. デザインサーヴェイ

4. 暮らしの相対化

IV 人に表紙を開かせる冊子

1. ガイドブックを作る
2. 地域の再定義
3. 紙としてのエスノグラフィ

V 結語

## I—はじめに: エスノグラフィのプロセス

私たちは2018年以来、人類学的なエスノグラフィ(民族誌)の研究実践が持つ二重の可能性、すなわち記録や研究業績としての可能性だけでなく、社会にある種の創造性をもたらす可能性について検討してきた(木村・内藤・伊藤 2019)。本論はその一環で、日本文化人類学会第52回研究大会(2018年5月)に報告した内容を基点に、エスノグラフィがどのように社会に働きかけ、影響を及ぼすのか明らかにするものである。言いかえると、エスノグラフィを単に書かれたスタティックな書物として見なすのではなく、エイジェンシーを持った存在として見なすことで、それが周囲に働きかける様相について検討するということである。

日本語で民族誌と訳されるエスノグラフィは、人類学的なフィールドワークで得たデータを元に他者の生について書かれた記録・書物(ドキュメント)である。従ってエスノグラフィは第一義的には他者や異文化に関するデータを提供するものであるが、更に人類学者のインゴルドによれば、良いエスノグラフィとは「それが描き出すものに対して繊細で、文脈的な含みがあり、細部が豊かで、忠実である」という(インゴルド 2020:126)。この点が単なる記録ではなく、しばしば「厚い記述」と呼ばれるゆえんである。ただしインゴルドはエスノグラフィを人類学そのものと同一視してはならない、とも述べる。エスノグラフィは「何かに関する研究」「何かについて学ぶこと」、つまり資料収集を目的とした記録である一方、人類学とは、「誰かとともに研究し、そこから学ぶ」ものであり、「人生の道を前に進み、その過程で生成変化をもたらす」ものであるという(インゴルド 2017:19)。

ここでインゴルドが、フィールドワーカーと現地の人々がともに生を探究し、「共通する未来へ

の道を模索する」なかで双方が生成変化していくプロジェクトであるとする彼独自の新たな人類学像を示す一方で、記録としての客観性や書物としてのスタティックな性質を強調する場合のエスノグラフィ像は、いささか古典的な定義であるように思われる。ただしインゴルドはエスノグラフィを書くという実践が単なる他者の客観的な記録作業であることを越え、書く主体と書かれる人々の双方における生成変化への契機が含まれていることを示唆している。彼は「それ(エスノグラフィ)が正確な記述以外の何かに変化していったら、わたしたちはその仕事を何と呼べばいいのか」と述べているように、エスノグラフィが単なる記録の範疇を超え、人と社会に変化をもたらす局面については、強いてエスノグラフィと称しない厳密な概念規定をしていることが窺える。

エスノグラフィを厳密に、他者の生の記録、すなわち書物として規定することを主張するインゴルドの視野にはおそらく、ビジネスや医療、保健、社会福祉、災害、教育など様々な場面でエスノグラフィの活用が広がり、他者の生に関する厚い記述という原義から離れていく状況が入っていたに違いない。事実近年のマーケティングやユーザーエクスペリエンスの調査などでエスノグラフィの活用が進んでおり(伊藤 2020)、量的調査とは異なる知見を欲する多くの企業が人類学者を雇用する流れが、北米のみならず日本でも見られるようになってきている。エスノグラフィの概念が急速に拡張していく状況を踏まえると、それに一定の歯止めをかけるかのようなインゴルドの概念戦略も理解可能になる。ただ付言すればエスノグラフィの活用自体は近年突然始まったわけではないことは、アメリカ人類学における少数の事例を見れば分かることである。例えばマーガレット・ミードやその「姉弟子」であるルース・ベネディクトは、書かれた書物、つまり人類学的な学術活動の成果物(プロダクト)としてのエスノグラフィによって社

会を改良していこうという発想を有していた(池田 2005)。その方向は戦時下において敵国情勢を探ることにあつたにせよ、エスノグラフィに単なる学術的な記録としての側面を超えた効果が以前から期待されていたことは確かである。

ビジネス等の現場におけるエスノグラフィの活用をめぐるのはプロダクトとしての側面のみならず、「プロセス」としてのエスノグラフィの側面に重点を置いた取り組みがなされるようになっていく。伊藤(2015)によれば、プロセスとしてのエスノグラフィとはフィールドワークを通じた問題の発見や思考の組み立ての過程であり、必ずしも書物としてのプロダクトに至らずとも、そのプロセスからは問題解決に向けた道筋を引き出し、組織・社会に生じる出来事や予測・設計に活かすことが可能となる。デザイン思考と呼ばれる学習過程が広まるとともに、エスノグラフィがその重要なツールの一つとして認識されるようになっていく(Gunn, Otto and Smith eds. 2013)。ここでいうプロダクトとプロセスとは決して対立するものではない。実際、プロダクトとして刊行されたエスノグラフィを社会で活用する場面があることを考えれば、「プロセスとしてのエスノグラフィ」はより包括的な概念である。ただ人類学では書物としてのエスノグラフィを執筆した時点で研究を完了したものとし、次の課題へ移行する研究者も少なくない。エスノグラフィが社会に及ぼす影響や活用段階までを視野に入れ、プロセス全体を俯瞰するような視点は十分に持たれなかったと思われる。

インゴルドは人類学が自己と他者に生成変化をもたらすこと可能性があることを示し、そのことは、「本質的に将来を予見するような仕事に世界中の人たちが従事するという変化」(インゴルド 2017:25)を通じて形成されると述べる<sup>2</sup>。おそらくこれらのことは人類学だけでなく、(インゴルドは区別するようにと釘を刺すが)エスノグラフィの性質でもあるだろう。実際社会の様々な局面で

エスノグラフィが期待されているのは単に事実を書き留めるだけでなく、そこから課題解決に資する洞察や未来像を描き出し、そこに関わる人々に何らかの変革に至らしめる点にあると思われるからである。

ではエスノグラフィが実際にスタティックな書物であるだけでなく、周囲の人々を巻き込みながら進んでいくプロセスとしても捉えられるとすれば、その波及はいかにして捉えることができるだろうか。またエスノグラフィのいかなる性質が周囲に影響を及ぼすことになるのだろうか。本論はまず、エスノグラフィを通じた未来予測が人々をどう動かし、かつその予測がどのようにずれていくのか検討するとともに、後半では、エスノグラフィの物質的側面に注目しながら分析することで、フィールドワークに基づく人類学的実践が社会のデザインに(意図的かどうかに関わらず)関係していく過程を明らかにしたい。

## II——予測のズレ:宮本常一の場合

### 1. 地域介入と未来予測

現在日本において「地域」という場の未来予測を行う主要なプレイヤーとして開発・金融系コンサルティング会社があるが、同じような場でフィールドワークを行う人類学者や民俗学者ならば住民からそのような調査の「評判」を聞く機会が少くない。その評判が往々にして芳しくないのは、単にそれが行政の単価の高い下請けに取まっているからというよりも、短期的な調査から導き出された端的に言えばそれほど当たるわけではない予測が「期待」込みで語られがちだからである。であれば、調査期間を引き延ばし、エスノグラフィックな方法で地域に長く・深く——まるで人類学者のように——関われば精度の高い未来への予測が可能になるのか、という問いが可能になろう。私た

<sup>3</sup>ちは2009年以来、新潟県佐渡島で実践・研究融合型プロジェクトを継続的に行っているが、この島では、かつて宮本常一(1907-81)をはじめとした民俗学者や人類学者がそれなりの時間をかけた調査を行い、その知見を元にして農業、開発、観光、文化財保存、人材育成などの面で提言や地域の将来像を語ってきた。近年私たちは宮本の写真アーカイブを用いたエスノグラフィックな調査も行っている。以下ではまず、そのプロジェクトを通じた地域住民や参加学生の「未来」語りの重層的なあり方を通して、上記の問いを考えたい。

宮本は1950年代末から島内で民俗調査を行い、徐々に地域振興にも関わるようになっていったが、そこで彼が取り組んだ主題は、道路港湾整備や商品作物の開発促進、公民館活動の活性化、芸能の継承、町並みや民具の保存展示の奨励など多岐にわたる。広義の開発実践に住民主体で参与することで、当時隆盛を誇ったマスツーリズム的な開発主義への回収を拒み、交流人口増加や離島の文化的劣等感の超克に至る、というプロットが用意されていた(門田 2017)。宮本の実践は佐渡だけでなく伊豆大島、八丈島など関東の離島、周防大島を初めとする瀬戸内海、佐渡や山古志村、種子島など、多方面で同様の展開を見せた。そのような調査経験を元にして宮本は離島社会の未来像について次のように述べている。

社会教育を充実するにはそれにふさわしい町づくりや公共施設を完備することが大切で、それはいまの離島振興法でやればよい。いまおこなっている島々の町づくり、島づくりはスケールが小さいように思う。たとえば隠岐の西郷町などは港の近くに広い土地があるのだから、官庁や公園・公民館の建設などは計画的にやればやれないことはないように思う。島民の支えになるシンボルをつくるのが大切だ。同じ金をかけてやるならば、外部に

向って誇り得ることのできる町づくりをすべきだ。(略)いま皆さんは島に住んでいることに自信を失っているのではないか。それではほんとうの地域振興はできない。島の皆さんひとりひとりが島に住むことに誇りと自信を持ったとき、はじめて愛郷心が生れる。人びとは自分たちの持っているものがどれほどすぐれているか、その自信を持ったとき、前に向って猛然と立ち上がるものである(宮本 2014:53)。

われわれが外に色目を使うのではなく、自分自身の持っているものに誇りを感じるようになってくると、事情は変わってくるのではないのでしょうか。言い換えると、皆さん自身のご先祖がその島で築き上げていった文化財、生活の糧にしたもの、それには非常にレベルの高いものがたくさんあるはずです(宮本 2014:68)。

宮本は決して公共事業を推進することのみが離島振興になると主張しているわけではないが、それでも上記のように社会教育に関わるいわゆるハコ物の重要性を繰り返し説いている。社会教育施設を通じて生活や文化財の価値を認識し、博物館等を通じてそれを外部に示すことで、住民が自らの生活に誇りを抱くように促し、ひいては経済的劣位と意識的な劣等感とが絡み合った「離島性」の克服にいたるといっているのが宮本の主張である。青年会との座談会や講演活動において語られるこうした提言は、自身の学術活動がもはや単に他者を知り記録する知識集積型の研究ではなく、それを通じて現地の人々に対してエンパワーメントを行うことであることを示している。その活動は今で言うところの「地域振興」や「住民参加型まちづくり」のサーキュレーションに近いが、社会全体が進歩や都市に向いていた1960～70年代の離島

を舞台とした発言と考えれば新規性があった。

宮本の未来語りは、住民に向けてアジテーションとも言える熱い口調で「〇〇をすれば××という未来が訪れる」式の、期待と予測が組み合わさった言明として行われることが多かった。しかし多くの施策が実行されたにもかかわらず、もたらされた社会的現実と予測とのずれは大きい。例えば新潟県の山古志村において宮本は1970年から地域振興に関わり、自身が所長を務めた近畿日本ツーリスト日本観光文化研究所の所員とともに観光資源の調査や提言を行った。その過程で牛の角突きを観光資源として「発見」し、国の文化財指定を受けるための協力を行ったが、彼がフィールドワークを行って報告書をまとめ、地域で講演活動などを行った一連のプロセスの帰結について、民俗学者の菅豊が次のような指摘を行っている。

牛の角突きを国指定重要無形民俗文化財としたことによって生じた、文化を担う団体と人びとが二つに分かれたという偶然の変容、そしてその変容が生み出してしまった伝統意識のずれ、さらにそれによってもたらされた関係の途絶。こういった、人びとのつながりが弛緩していくことを、文化財指定時に宮本や観文研所員が予期できたはずもない。しかし現在の分断状況は、その約四十年前の文化財指定に端を発していることは間違いない。民俗学者の善意の介入は、企図しない状況を生み出してしまった。約四十年をかけて徐々に進行したこの関係の分断は、いまではそれほど短日月に修復できないような難題となっている(菅 2018:19)。

宮本が「善意」で行った民俗学的な調査や提言などの結果、角突きが団体で分裂し、地域社会に分断をもたらしたという批判的な指摘で、近年では宮本の足跡に関わる同様の批判的な検証が広がり

つつある<sup>4</sup>。このような予測や期待と現実のズレは、菅の言うようにエスノグラファーの意図したものではない。しかしそのズレは往々にして地域にくらかの影響を及ぼすものであり、エスノグラフィの持つ「創造性」にはこのように研究者自身にも操作できない現実を創り出していく側面があることを示唆する。

## 2. エスノグラフィとしてのフィールド写真

このようなエスノグラフィのエイジェンシーを地域住民の視点から捉えるにはいかなる方法があるだろうか。その観点で筆者らは、佐渡において宮本常一が1950～70年代に撮影したフィールド写真を用いたフォトエリシテーション調査を行ってきた(門田・小西 2018)。フィールド写真はプロダクトとしてのエスノグラフィ自体ではないが、渋沢敬三の援助を受けながら宮本は膨大な写真を「メモ代わり」(土屋 2011:223)として撮ってきたため一種のフィールドノートとしての性格を有し、一部は後年に写真民族誌として出版されていることから(宮本 2009a; 2009b)、エスノグラフィの一部だと言っても良いだろう。私たちは周防大島文化交流センターから提供を受けた宮本写真をA4用紙に印刷し、それをクリアファイルに入れて学生とともに撮影現場周辺を訪れ、住民に提示しながら過去の記憶に関する想起的な語りや、そこから引き出される自由な語りを収集してきた。いわば宮本が見た1960年代前後のまなざしに現代の人々がどのように感じ取るかの調査である。

宮本が撮影した写真の主題は雑多であるものの、訪れた地域に関する彼自身のまなざしが表れている。被写体を総覧していくと宮本がその地域について何を興味の対象と感じ、シャッターを切るに値すると認識していたのかという、興味の内外を区切るフレームが存在することが窺い知れる。佐渡を事例に言えば、同地で撮影した約4千枚の写真のうち、九学会連合調査の班員として訪れた

1950年代後半から60年代前半には民具や伝統的な労働、また粗末な道や民家に関わる写真が多く、1960年代後半から徐々に観光客の姿や開発中の景観写真などが増えるようになる。彼自身の移動スタイルが徒歩から車での送迎に変化していったことから、そのままざしは生活者に近い視点から徐々に観光客に近い視点へと移り変わっていく。それは宮本が捉えた島の「発展」過程であり、彼が離島住民に対して述べていた、「ご先祖がその島で築き上げていった文化財、生活の糧にしたもの」を離島社会が観光資源として認識していく開発過程でもあった(門田 2021)。

このような写真を現代の住民に見せながら話を聞くと、主に二種類の特色ある語りが収集された。第一には、島の衰退に関する語りである。宮本は1960年代当時の佐渡を高度経済成長の国土発展から取り残された離島と認識していたが、島内人口は現在の倍近くあり、当時の写真は現代の島民から見ればむしろ「栄えていた」「賑わっていた」と映る。そのため以下のように、現在との対比的な語りがしばしば聞き取れることになった。

【事例1】2017年8月、私たちは学生とともに、宮本が撮影した佐渡鉾山(金山)の現役時の写真を持って佐渡の集落を歩いた。鉾山は1989年に閉山したが、宮本が訪れた1960年代当時はいまだ採鉾能力が残っており、それなりの活気があった。その写真を見たある高齢の女性は次のように語った。「やっぱりね、私たち学生の頃は、鉾山はまだやってたから、学校の生徒だって相川町の小学校だけで43人くらいのクラスが3クラス？ 6学年で700～800人くらいいたんじゃないかな？ 相川町だけで5万くらい人口がいたんだから。いまは空き家ばっかだよ。だから世界遺産になれば、1年であれ2年であれ人が来て、町全体も、市全体も潤うんじゃないかなと思うんだけど

…。でも100万人観光の時はあちこち宿泊設備もあったしあれだけいまもう集客ができないんじゃないかな」(門田・小西・杉本・鍋倉編 2018)。ここで語られることは鉾山そのものというよりも、時系列上のいくつかの出来事である。まず1960年代の鉾山の様子から想起された当時の生活や地域の活気ある状況に言及され、次に、当時地域を挙げて目指されていた「100万人観光」というスローガンが示唆されている。これは実際1990年頃に達成されたが、1970～80年代を通して佐渡の開発目標として人口に膾炙していた。また「世界遺産になれば」というのは、2010年代から現在まで展開する佐渡鉾山の世界遺産登録運動である。宮本写真を基点に複数の「未来」がイメージ上に浮かび、過去の未来像＝現実が、決して期待通りの賑わいや地域の活性化に繋がらなかったことがこの短い語りの中に示唆されている。

以上は一例だが、宮本写真を切り口として語られることは、宮本が描いた未来像が現在とかけ離れていることへの一種の悲哀や諦念であったと言って良い。言いかえると、こうした調査を通じて分かることは、宮本の予測はひいき目に見ても一時的な隆盛で終わったということであり、むしろもっとも避けるべきだと述べていたマスツーリズム(「100万人観光」)へと地域が邁進したことや、交流人口や文化的劣等感が「改善」されたわけではないことが住民の語りからも明らかとなった。佐渡の人々は人口絶頂期の頃の写真を見ても、そこから明るい未来を語ることはないし、いくらコンサルティング会社が報告書において「〇〇をすれば××という未来が訪れる」式の、期待と予測が組み合わさった言明が書かれたとしても、多くの人はそれを冷めた目で見ている。多くの島民が真実味を感じている唯一の予測は人口動態調査であ

り、島内人口が将来的に更に減少するというその予測が持つリアリティは、事例1のような過去・現在・未来の時間軸を語る際に憂鬱なムードをもたらしてしまう。

### 3. 再帰的地域社会

ではエスノグラフィ経由の予測はなぜずれるのだろうか。「〇〇をすれば××という未来が訪れる」式の将来予測のずれは「未来の学」である経済学においてモデルと現実との差異として語られ、人類学的な未来予測へのニッチを開いてきた(Appadurai 2013)。しかし同時に、エスノグラフィックな予測を支える理論的基盤があくまで予測時点でのものに制限される、ということにも留意しておく必要があるだろう。これは単に宮本常一が1960年時点での視点や思考の枠組みに縛られていた、という時代的制約だけではない。例えばかつて「〇〇人」「△△社会」についてのエスノグラフィがある種の型(パターン)の抽出によって当該社会の行く末を認識できていたのは、儀礼やコミュニケーションに顕現する「〇〇人の文化」が反復的に継承されるという理論に基づいていたからであるが、それは「〇〇人」が自ら進んでその型をコントロールするような、いわゆる再帰的近代においては予測が現実からずれていかざるをえない。再帰性や流動性の高まりは、佐渡においても「観光客はこのようなものを求めているに違いない」といった自己イメージのコントロールを誘発し、住民自身によって宮本が予測していた時点での生活や思考の型を次々と変化させていった。加えて、報告書や民族誌のような地元に還元されるプロダクトは地域振興を企図する地元の知識人やローカルリーダー達によって学習され、そこで書かれていたこと自体が人々に影響を与えるようになる。その結果、フィールドワークで観察された人々の生のあり方はエスノグラフィを媒介にして再帰的に変化を被ることになる。その点から、宮本写真

によって引き出される特色的な語りの二点目は、佐渡の社会問題や地域開発の課題を省みるような、俯瞰的かつ分析的な語りである。

【事例2】宮本常一が観光客向けに行われているたらい舟を撮った写真についての調査から、この写真を見た現在観光客向けにたらい舟体験を営んでいるKさんはこのように述べる。「たらい舟は(漁師には)もう売れない。だから自分で動かして人に喜んでもらう。自然と一緒に自分も周りの人も楽しめるところが魅力。スキーがもともと狩猟で使われていたように、たらい舟も生活の一部だったものが観光資源になったもの。生まれた時は産湯の桶を使って死ぬ時は棺桶に入る。人生における桶の大切さを改めてここで学べる。人と自然(海)が繋がるし、人と人も繋がる。宿根木のたらい舟は時代の逆行だ」(Kさん、2017年8月)。ここではマスツーリズム批判としての実践と未来語りが示されている。「過去」の生業の象徴であるたらい舟を用いて観光客を楽しませることを「時代の逆行」と呼ぶその分析的な視点は、宮本が常に佐渡の人に伝えてきた、古い生活様式を捨てずそこに価値を創造していく意義を達成したかのような視点である。

【事例3】次に掲げるのは、稼働していた時代の佐渡金山を撮影した宮本の写真を見た人の語りである。「昔とは違って、観光客もみんな学があるんだ。つまりガイドも昔とおんなじじゃダメだ、変わっていきなきゃならんだけど、センスのあるガイドの先生がいないんだよ」。「リピーターが少ないのが問題だ。一回きたら満足してしまうガイドじゃダメなんだ。立体ガイドでは、ガイドブックに書いていないことを話すだけでなく、その場所そ

の場所にまつわる民話や歌を披露したり、楽器を体験してもらったりすることでリピーターを獲得できる」(Iさん, 2016年8月)。ここにあるのは観光客のまなざしの変化, 新たな観光への視座に関する発話である。

宮本写真を素材にフィールドワークをすることは、調査する側にとっては新たな知見を得る機会かもしれないが、写真を見せられ、言葉を発することを求められる地域住民にとっては日常を省み、自らの記憶や生活史を想起し、予測や未来を語ることで自分の考えを整理したり、新たな発想を得たりする契機であると言える。宮本写真を見ることは過去の佐渡の姿を学ぶことであり、それを通じた生活世界の客体化の機会である。事例で挙げられている何らかの形で観光や地域開発に関わる人々は、日頃からこれに類する学習機会が多く、様々なリソースを総合することで自らの立ち位置を調整し、ガイド活動や観光事業に活かしている。宮本だけでなく過去の人類学者・民俗学者や観光学者などの書いたエスノグラフィックなプロダクトは学習のリソースの一部となってきた。地域社会が自らのアイデンティティを構築し、他者に積極的に開示していくことが際限なく期待される現代においては、ある地域に関するエスノグラフィを描くことは事実上、地域社会のアイデンティティポリティクスのためのリソースを供給することを意味する。エスノグラフィの成果をどう用いるかは書く研究者ではなく、書かれた地域の側が選択することであり、だからこそ地域社会に関するエスノグラフィックな予測や期待は、書いた側の認識とずれ続けるのである。エスノグラフィと社会デザインとの関係を考える上では、書き手の意図とはまた別の位相においてエスノグラフィが他者や社会に影響を及ぼすと言う点についてさらに検討を行う必要があるだろう。そこで以下では、エスノグラフィが書いた主体の意図を越えてエイ

ジェンシーを有していく過程について論じたい。

### III——エスノグラフィの物質性

#### 1. 調査報告書

佐渡に限らず、日本の地域社会には過去数十年間に大学等の研究者が大勢訪れ、それぞれの分野からフィールドワークを行い、「報告書」という形で成果を残している。エスノグラフィックな報告書を描く分野として、人類学や民俗学だけでなく農村社会学や宗教学、建築学、社会工学、生態学など数多くの分野を挙げることができ、研究者や学生がローカルな主題に取り組んできた。しかし多分に教育的要素の強いそのような活動履歴は研究業績としてはそれほど重視されず、研究史に残るものとして扱われることも多くはなかった。またその一部は、冒頭で述べたコンサルティング会社の報告書同様の性格、すなわち業務として課せられたプロジェクトを計画通りに実施したという説明責任(アカウントビリティ)を果たす、との性格を帯びている。グレーバーが言うように、官僚制的組織——その中には大学も含まれる——の中で求められる書類仕事(ペーパーワーク)は無味乾燥で、書かれたものも仕事を「やった」という事実以上の広がりを含まない真空のものである(グレーバー 2017:73)。もちろん社会調査報告書の中には真空とはとても言えないような豊穡な世界を持つものも多いが、簡素な装丁を含め官僚的文書のような調査報告書も決して少なくない。では、しばしばモノクロで刷られる殺風景な報告書は、ただ公立図書館郷土資料コーナーの肥やしとして温存されるだけで、地域社会に影響を与えず、その価値を多角的に分析する価値もないと言い切って良いだろうか。以下では、提言や予測などとはまた別の角度から、エスノグラフィが社会にもたらす影響を考えたい。

【事例4】2016年度に私たちは佐渡にある稲いな鯨くじらという漁村の祭礼を映像民族誌にまとめるプロジェクトを行った。最終的に2017年2月に市民向け上映会や写真展の開催をもって終了した同プロジェクトの最初の段階として、2016年5月に撮影許可の許諾と趣旨説明のため、集会所に地域の人々に集まってもらった(図1)。前年の予備調査で面識のある人もいたが、多くの人は研究者や学生が中心となって撮影に入るといふこと、またカメラが向けられること、映像民族誌という耳慣れない実践に対し一様に戸惑いの表情を見せていた。堅い空気を一変させたのは前年の予備調査の報告書を配布した時である。映像撮影の前年である2015年8月、私たちは東海大学や首都大学東京(現東京都立大学)、立教大学、千葉大学の学部生・大学院生とともに祭礼に関するインタビュー中心の社会調査を行い、2016年3月に調査報告書(小西・吉村・戴編2015)として刊行した。緑色のレザック紙に包まれた120ページほどの同誌を集会所に集まった住民に配布すると、小さな驚きの声が上がった。しばらく全員がバラバラとめくっているうちに、「ここに出てるのは誰々だ」「俺の話も書かれとるぞ」といった笑い声が出始め、場の空気が氷解していくことが手に取



図1 集落で調査依頼を行う(著者撮影)

るように理解できた。佐渡には多くの大学がフィールドワークに訪れるが、この集落にとっては過去数十年で初めてのことであり、住民にとって報告書は自らの生活や祭礼を初めて他者のまなざしで見える機会であったといえる。

映像記録の許諾が無事に得られた私たちは、この事例からエスノグラフィが持つ力の大きさについて認識することになった。ただそれは必ずしもエスノグラフィにおいて書かれたことや表象による力というわけではない。一般的な傾向として、印刷費圧縮のためフォントサイズを落とし行間を詰めた文字ばかりの——更に人に読ませる文章に不慣れた学生が書いた——報告書を熟読するインフォーマントは多くなく、電話帳や行政から配布されたA4フォーマット冊子などと合わさって本棚の隅に収納され、再び開かれることはあまりない。従ってこの場合の人に働きかける力とは、内容よりもむしろ自らが書かれたエスノグラフィを渡されたこと、もっと言うとエスノグラフィのマテリアリティ(物質性)に起因するものだと言って良いだろう。おそらくエスノグラフィが持つエイジェンシー、すなわち人々に働きかけ、調査する側とされる側の双方の生成変化をもたらす契機は、提言や未来予測といった「介入」と同等かそれ以上に、このようにエスノグラフィがモノとして存在すること、つまり物質的な側面において議論する必要がある。

国際法の生成プロセスをエスノグラフィックな視点で分析した法人類学者のライルズは、国連や国際NGOなどの議論の場において既存の法律文書がいかに関与者の法概念や社会関係を媒介するのかに注目している(Riles 2006)。ここでは法律文書が持つ特色ある文章表現やカッコに至るまでの微細な文言が法の生成に向けた議論に作用し、方向付けを行っていくことが明らかにされており、

そのこと自体は興味深いものの、専門的立場にある人々に法律文書が働きかけることと、上で筆者が指摘したエスノグラフィの物質性とを全く同じ位相に位置づけることは難しいだろう。それは文書の読解に基づく解釈、議論といった近代国家や権力の構成要素である知識実践と、視覚や触覚といった身体的な位相において直截的に訴求してくるモノの違いであると言いかえても良い。そのことを考えると、佐渡で宮本常一が写真を多用した記録を残し、写真民族誌などに転用されていることや、武蔵野美術大学における彼の学生が建築学や民具学のような形あるモノの研究に従事し、その観点から佐渡においてもエスノグラフィックな調査に従事してきたことは、物質性に着目したエスノグラフィのエイジェンシーを考える上では興味深い事例となる。そこで以下では、1970年代に宮本系のフィールドワーカーが残した民家・民具などに関わるエスノグラフィの系譜を史的に振り返り、モノとしてのエスノグラフィが住民にどのように働きかけたのかを考えてみたい。

## 2. 武蔵美の民家調査

南佐渡にある宿根木集落(図2)は、近世には北前船の船大工や船主で賑わった集落であり、建て込んだ町並みは美観が保たれ、見物に訪れる観光客も多い。町並み保存が行われる過程では多くの

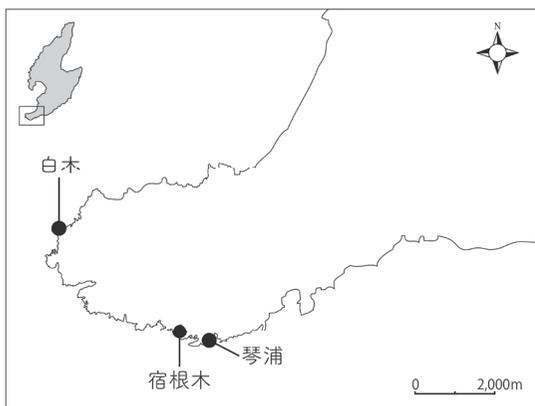


図2 南佐渡の集落

研究者が調査に訪れており、1970年代、80年代、90年代には武蔵野美術大学(以下、武蔵美)、東京大学、長岡造形大学の建築学の民家調査が入り複数の報告書を残している。とりわけ武蔵美で建築やデザインを専攻する学生らが行った1970年代のフィールドワークは、精密な集落図や民家実測図を含む報告書を刊行したり、地域の地形や民家を含む大規模な模型を作成し地元博物館に残したりした。その成果は民俗学的な視点を含むエスノグラフィと呼ぶべきものであり、現在でも多くの住民の記憶に残っている。

この発端は武蔵美生・相澤韶男が大学の後輩たちに佐渡を旅することを薦めたことによる<sup>6</sup>。のちに相澤は宮本の後任として武蔵美に赴任した建築学者・民俗学者であるが、学生時代の1967年に映像作家・姫田忠義とともに南佐渡を旅し、その後、1970年にも宮本らと同行している。彼の後輩である真島俊一ら、のちに建築事務所・TEM<sup>テム</sup>研究所を設立する学生数名が、1968年に白木<sup>しろき</sup>という南佐渡の小さな集落で民家調査を開始し、1969～71年にその近隣にある宿根木集落で、1971～73年に琴浦集落でも調査を行った(日本観光文化研究所・宮本常一編 1975)。大学紛争のために休講が多かった当時、彼らは佐渡に長期滞在して、町並みや民家構造の実測調査をはじめ、親族や信仰、年中行事、日常生活に至るまでホリスティックな調査を行った。その成果は宮本常一が武蔵美で開いていた自主的な研究会で報告され、佐渡研究の先達である宮本から指導を受けた。単に建築構造物に留まらず、人々の生活のディテールに迫ろうとした真島らの研究に宮本も大いに関心を抱いたようで、1975年に宮本が主導して文化庁補助事業で行われた南佐渡の民俗調査では、真島らの研究が主軸を占めることになった。

それらの調査を元に地元自治体である小木町から発行された報告書『南佐渡の漁撈習俗』(1975)は、漁撈を中心テーマに掲げてはいるが、そこに

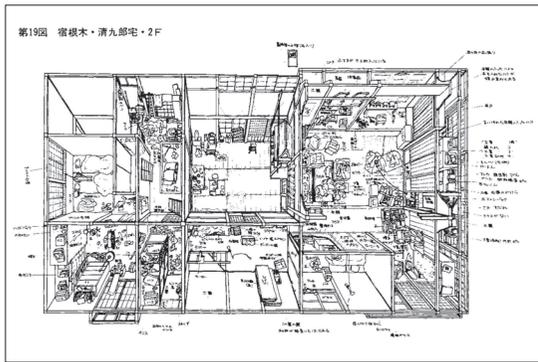


図3 『南佐渡の漁撈習俗』における宿根木集落民家実測図(真島 1975:25)

は真島らの建築学的フィールドワークの視点と宮本をはじめとした民俗学系のフィールドワークの視点とがハイブリッドに示されている。とりわけ通常的人类学、民俗学的なエスノグラフィと比べた場合に特徴的だと思われる点として、報告書には図2のような集落図や民家の構造、その使われ方への観察結果が精緻な図版に描写され、住人の生活のイメージを強く喚起させる図面が描かれている点が挙げられる(図3)。真島らは住人が漁や農作業に出る日中に家に上がらせてもらい、直径10cm以上の形あるモノは全て描くというルールで描写し、かつモノや場所を誰がいつどう使うのか網羅的に調べた。民家や民具といったモノから動態的な生活に明らかした同書は、この種の報告書としては異例の学術的評価を受け、第一回今和次郎賞を受賞することになる。南佐渡の建築物や空間特性をエスノグラフィックに捉えたこの報告書は、更にその後、宿根木が重伝建に指定されるにあたって幾度も行われた町並み調査の起点ともなった。

### 3. デザインサーヴェイ

ここで武蔵美の学生らが行った調査は、デザインサーヴェイと呼ばれる1960-70年代の建築学的フィールドワークで流行した手法に強い影響を受けた仕事だと言って良いだろう。日本の建築学史

には、考現学として知られる今和次郎の仕事の影響、また「住み方調査」で知られる建築家・西山仰三の影響を受けつつ、デザインサーヴェイに至るような、歴史を持った集落を中心的なフィールドに積極的にフィールドワークを行う系譜が存在する(加島 2019:183)。デザインサーヴェイは、建築史家・伊藤ていじの影響を受けたアメリカ・オレゴン大学建築学の学生らが1960年代に金沢で実施した民家調査に端を発する手法であり、それを伊藤や宮脇檀、神代雄一郎ら建築学者が、大学の実習などを通じて広めた民家や集落の実測調査の手法である(日本建築学会編 2018)。旧来的な民家研究では民家を静態的なモノとして扱い、その地域性や歴史の変遷を収集されてきたのに対して、伊藤は民家の生態学的アプローチを採用した。言いかえると地域の環境・歴史・生活といった生態条件の中で変化する家を一種の主体性ある存在として扱うのがデザインサーヴェイであった。大学の実習で展開した具体的な作業としては、農山漁村などの集落や門前町などに集団で滞在し、集落や民家の実測を行い、集落全体の俯瞰的な地図を各民家の間取りや敷地などを含めて極めて精緻な作図で表したり、集落および民家の断面図を表したりすることが中心となる(明治大学神代研究室・法政大学宮脇ゼミナール編 2012)。それは歴史的に長く存在する集落や民家の存立条件を建築構造や地域環境と連関させて明らかにするものであり、ヴァナキュラーな建築物の特性を、新たな設計や計画につなげていくための基礎研究として活かされた。

他方民俗学においても古典的な研究ジャンルとして民家研究があり、主に農家の建築などについて建築構造の地域性や村落構造を主題として研究が行われてきた。日本よりもむしろ北欧やドイツの民俗学で盛んなジャンルで、その成果が大陸ヨーロッパに多いオープンエアミュージアム(野外博物館)へと繋がっていった(杉本 2002)。宮本

常一もまた民家研究に興味を抱き、野外博物館に強い関心を持つ渋沢敬三の影響もあり、若い頃より民家に関するデッサンや文章を多く残している。谷沢(1999)は宮本の民家研究の総レビューと言える論考だが、そこでは、宮本の民家に対する関心が共同体に関する史的関心だけでなく、家という物質文化を通して人々の生活を見ていくような、のちの民具研究的な興味へと繋がっていることが理解できる。実際武蔵美への就職後、美大の学生がモノの形象の把握に強い関心を抱いていることを肯定的に記しており(宮本 1993:199)、宮本のもともとの興味が学生の関心と合わさることで具体化したことが窺える。

また宮本の在職時の武蔵美には建築学科に磯崎新をはじめ気鋭の建築学者が揃い、当時最先端の手法として注目されていたデザインサーヴェイが宮本や学生にも関心が持たれていたことが日記から窺い知れる。例えば1971年の日記には以下のような記載がある(田村編 2012)。

1971/6/4 府中・鷹の台・武蔵美◇学校。明日、デザインサーベ<sup>ア</sup>ーのシンポジウムをする<sup>マ</sup>としてその打合せをする。真島らと。けい子来る。

1971/6/11 府中・鷹の台・武蔵美◇学校。教育実習のため2年生は出席少なし。かえりに須藤たちと国分寺の喫茶店でデザインサーベ<sup>ア</sup>ーについてはなす。人数が多すぎてはうまくいかない。やはりよい仲間づくりが必要であることについてはなす。

1971/6/15 府中・鷹の台・武蔵美◇朝ツーリストへゆき、神崎君たちと博物館の文献整理ケースのことについてはなす。ついで姫田君の友人、NETの人と日本再発見についてはなす。(中略)そのあと相沢[韶男]君とデザインサーベ<sup>ア</sup>ーニツイテハナス。

日記には真島、姫田、相沢といった宮本に近しい人々の名とともに「デザインサーベ<sup>ア</sup>ー」に言及されており、この4年後に出版されることになった前書の調査手法が、既にこの時点から宮本系エスノグラフィの一環として注目されていたことが分かる。

当時デザインサーヴェイを主導した神代や宮脇など、工学部系の建築学の成果と比較した場合、美大系の建築学である武蔵美生のデザインサーヴェイが単に建築物だけでなく、人々の生活にかなり重点を置いているという点が極めて特徴的であることがわかる。ここに宮本を介した民俗学の観点が含まれていることが理解できる。特に家の中のモノを家財道具だけでなく消耗品や脱ぎ捨てた服に至るまで詳細に描く点は、民家やモノを人間の生活と切り離さず、社会的な存在としてみなしていたことが伝わってくる。そのことは1990年代に真島らがTEM研究所として行った、宿根木の集落調査を記した2巻の報告書においてより鮮明に出ている。これらの報告書もまた行政の委託事業として行われ、重伝建地区の指定前後における町並みの特性を記した典型的な行政調査報告書だが、その内容は建築物に留まらず、婚姻ネットワークの図式化(図4)に顕著に示されているように、かつて『南佐渡の漁撈習俗』で試みた地域社会の全体的把握がより追求されたエスノグラフィに仕上がっている。彼らの活動は宮本流の民俗学を吸収しつつ、建築学という当初の枠を越えて発展したといえる。

#### 4. 暮らしの相対化

ただし本論の観点から重要なのは武蔵美生のエスノグラフィの学術的評価よりも、それが住民にもたらした影響である。真島は佐渡での調査を回顧した文章を書いており、その回想が住民に対する彼らの立場性を知る上で興味深い。彼らの調査は民家の間取りを実測するもので、プライベート

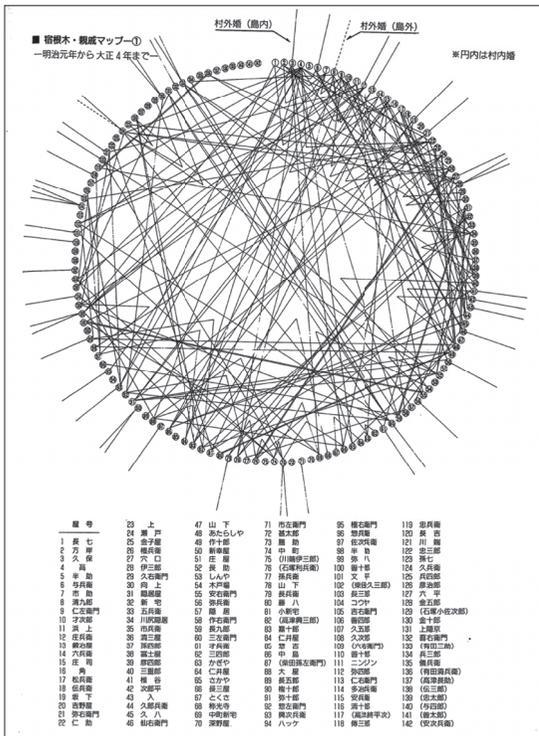


図4 宿根木集落における婚姻ネットワーク (TEM 研究所編 1993:25)

な空間に上がり込み、通常は他人に見せたがらない生活の様子をつまびらかにしてもらうことが必須となる。そのため当初は調査協力を得られず、東京の大学生という高学歴の人間に対する反発心もあり距離が詰められなかったが、漁の手伝いをしたり酒を飲んだりするうちに青年、「トウサン」(家庭を持つ壮年男性)、「カアサン」(トウサンの妻)の順に理解を得られるようになった。また当初は何らかの商売だと訝しがられていたが、以下の経緯で疑いも晴れていった。

村の人たちは最初われわれが書いている図面が金になると思ったらしく、それが金にならないことがしだいにわかってきたことも、調査を理解してもらうひとつのきっかけになったようだ。われわれがアルバイトをしながら調査にきていること、村に滞在している間は一銭にもならぬこと、図面の売り場所が

ないことなどである。初めは「売り場所はないです。今度も売れないでしょう」といっても信じてもらえなかった。しかし、村での滞在期間がのびると、衣服がだんだんよごれ、ボロボロになっていくのを見ていて、やっぱり売れないのだということになっていったようで、お金にならぬことだとわかると村の人たちは親切だった。学生も勉強で大変らしいが、さぞ親も大変だろうと、あわれみみたいなものもあったのかもしれない(真島 1976:68)。

東京の美大生が描く問取り図は精緻で、住民が見ると売り物のように思えるようなものだった。

彼らは、高校や中学しか出ていない漁師が多い住民にとっては遠い存在であったと思われ、離島の生活を外部的なまなざしで「上から」見ているのではないかと感じられていたようだ。ところが上記のようなつきあいを経て、「あいつらも東京で偉そうな顔をしているやつじゃないというふうな認め方になってきて、どんどんつき合いができるようになった」(真島 1976:69)。当初学生らの図面はおよそ日頃の村での生活では見ることのない表現物、つまり紛れもない他者のまなざしだった。その「他者」たる東京の若者が、住民と酒を飲んだり、金がないので漁師の手伝いをして魚をもらったりしているのを見ているうちに、住民からすれば他者性を感じられなくなった。すると途端に、我が家を図面にいくらかでも描いてくれという住民が増えてきたのである。

村落での調査に限らず、人々の実践やモノをエスノグラフィックな手法で観察したりインタビューをしたりしていると、こんなものを調べてどうするのかとインフォーマントから質問を受けることは珍しくない。当事者には「当たり前」の日常をわざわざ調べていくことは理解の及ぶ範囲ではなく、学生なり専門家なりがそれをやっている

のならば、自らの生活には当事者も知り得ない「価値」があるのかと思うこともあるだろう。実際真島らが調査した1970年代の佐渡では、古い生活様式や建築物が顧みられることなく打ち捨てられていた。宮本常一がそこに都市的生活と対比させたコンプレックスがあると述べたように(門田2017)、狭く住みにくい家は敢えて残してきたというよりも、古い因習が形として残っていたものにすぎない。事実この地域の住民たちは「先祖代々の家」を守ろうなどという意識はそれほどなく、むしろ少しでも良い条件の家があればどんどん買い換えるし、狭くて湿気の多い海岸段丘下の谷地の家を手放し高台に引っ越す人も多い(藤原2019)。更に、町並み保存が始まると改築が法的に制限されるので、コンクリート造りの納屋や家屋へと駆け込みで立て替えるケースも数多くあった。そのような事情を鑑みると、都会の美大生が古い民家に何らかの「価値」を見だし、それを図面で描いたことは、素直な驚きだったと思われる。加えて彼らは宿根木集落の模型を紙で作成した(図5)。

その後佐渡では1980~90年代にいくつかの集落で町並みや民家の保存に向けた機運が高まり、1991年には宿根木が文化庁の重伝建(重要伝統的建築物群保存地区)に指定された。町並み保存に際しては住民の意志に基づいて民家の修景事業が行われ、より伝統らしさを強調したファサードへ



図5 小木民俗博物館に展示されていた集落模型(筆者撮影)

と戻っていく。ここに至って家や町並みの「価値」が住民自身にも認識されるようになっていったのであるが、このような再帰的な伝統意識の形成を最も早い時期に喚起したものが先の報告書だった。学術向けに文字のみで書かれた硬質の報告書ではなく、何が表現されているのか誰にでも一目でわかる図面や模型を含む彼らの成果物は、それ自体が島の人にとって他者のまなざしが物象化したものであり、家や町並みという生活環境への省察を促す条件を作っていたと言って良いだろう。

## IV——人に表紙を開かせる冊子

### 1. ガイドブックを作る

しかし、外部によってもたらされた報告書が必ずしもエイジェンシーを有し、再帰的な自己認識の変化を誘発するわけではない。前述のような官僚制的アカウンタビリティのために発行される報告書は人々の関心をそれほどかき立てることなく、人々に表紙を開かせることがないという意味では、他者に働きかける力が弱い。そうした経緯もあって、私たちの共同研究で佐渡に引率する学生の中から、訴求力があり実質的な意味のある報告書を作りたいという声が上がった。

2014年、首都大学東京・社会人類学専攻の学部生約10名とともに、南佐渡・宿根木集落にある民俗博物館の民具調査を行った。そこは廃校舎を転用した手作りの博物館であり、かつて1970年前後に住民の寄贈によって集まった展示は点数こそ多いものの、展示替えがないため埃を被ったままの民具も多く、解説文も限られていることから、見学者にとっては1960年代以前の生活道具が何を示しているのか理解できないケースが多い。そこで学生たちはジャンルごとに展示品の撮影を行い、近隣集落でその写真をもとに、各々のモノにまつわる記憶や使用法を探り、解説文やコラム、館内



図6 『佐渡國小木民俗博物館ガイドブック』(首都大学東京社会人類学分野編)

案内図を作成した。その成果を学生たちは手持ち可能なA5サイズ・32ページの「ガイドブック」を自主刊行した(図6)。多少ざらつきのある220kgの厚手の用紙を使用し、フルカラーで、手にしたときの感触が「報告書っぽくない」ものに感じられるような戦略を彼女たちは練った。

ただ民具研究の訓練を受けていない学部生の力量では網羅的な図録とはいかず、いくつかの民具の背景を掘り下げつつ、来場者に博物館を見る一つの視点を提供することに留まった。自費出版のうちに原価で販売したこの冊子は島外からの来場者にそれなりに売れたが、むしろ興味深いのは地元の人々の反応である。それまでフィールドワークを行い報告書を渡しても通り一遍の謝礼で済んでいた事後の様子が、この冊子においては異なり、とりわけかつて博物館の立ち上げに携わった高齢者からは、これを契機に停滞する博物館の建て直しをしたいという声が上がったのである。

## 2. 地域の再定義

学生たちが調査した佐渡國小木民俗博物館は、1970年頃、集落の人々が宮本常一や地元の僧侶

の呼びかけに応じて、自分たちが卒業した学校の廃校舎に生活道具を持ち寄り、のちに行政にかけあって公立博物館になった経緯を持つ。高度経済成長期の「進歩」が一段落し、経済成長一辺倒から「地方」や「文化」を見直す気風が広まりつつあった1970年代には、日本各地で住民参加型の開発が文化運動として行われ、宮本たちも複数の地点で地域振興と文化財保護の両立を目指した博物館運動に関わっている(日本観光文化研究所編 1989)。小木民俗博物館もそうした背景を持ち、捨てるべき存在と見なされた生活道具が文化財なのだということを住民自身が理解する機会となった(門田・杉本 2013)。

先の武蔵美生たちも参加し地域の若者と共同で行われた1972年の開館作業は、外部のまなざしを媒介にもたらされたローカルな資源の発見の過程であった。その分、通常の公立博物館にはない住民たちの思い入れが強かったが、「ガイドブック」を作成した学生たちはそのような歴史的経緯をその時点ではあまり知らず、都市部のミュージアムと比べて分かりにくく、洗練されていないと感じた彼女たちの視点で進んでいったため、地元の年配の人々の過去の記憶を喚起したのは予想外のことでもあった。冊子刊行後の2015年、任意団体として博物館活性化委員会が作られ、博物館活用に関する文化庁補助事業の助成金にアプライすることになった。現代の住民参加型の地域開発では、かつての大規模開発のように政治家に陳情して予算投下を待つのではなく、省庁や地方自治体の提供する助成金活用が不可欠となる。すると必然的にペーパーワークに長け、「通る」申請書を書ける人物の有無がそのプロジェクトの成否を左右する。文化庁の助成事業に関しては佐渡の人が申請書を作成したが、研究者が調査先の住民団体のために書類を書くケースもある。

このように作られる申請書もまた、それ自体が地域を再定義する性格を持った生産物であり、そ

ここに研究者が何らかの形で関わる以上はその作業からも無縁な場所に立つことは不可能である。上記の事業でも私たちが執筆してきた論文や書籍、学生と携わったプロジェクトの履歴は「これまでの業績」として盛り込まれただけでなく、地域の人々が私たち外部の研究者・大学と連携することで新たな文化資源の発掘・活用・情報発信に繋がると明記された。言いかえると私たち自身もまたリソースの一つとして位置づけられた。学生たちが作成した「ガイドブック」やこれまで私たちが書いた論文・報告書が、図らずもかつて武蔵美の学生や宮本が行ったのと同じように、住民のリアクションを促し博物館活性化事業の始まりにつながっていったのである。

当初2年間採択されると見込んだ助成が1年間に留まったことから、その成果は必ずしも想定していたところまでは至らず、終了後にはここでもまた説明責任を果たす「報告書」が作られたが、その成果よりもむしろ、住民の中から自発的に活性化事業の立ち上げに向けたアクションが生じた点が重要である。というのにもかかわらず立ち上げの時期には運動の中核的拠点であり、地元の若者が未来にむけて熱く議論を交わした博物館が長年放置され、地元の多くの人々が積極的にその問題について深く言及することを避けてきたというのは、ある面では未来に向けた島民の諦念を象徴していたからである。埃を被った民具や、40年前の解説文が更新されることなく色褪せた博物館が島の諦念の物象化された存在であると喩えるなら、それを活性化しようという年配の人々の試みは、諦めの念を否応なく引き出す地域の衰退や高齢化などの抗いがたい未来像を、別様の形へとずらしていこうとする彼ら自身の変化であったと言える。

### 3. 紙としてのエスノグラフィ

これらの事例からはエスノグラフィのプロダクトとしての側面、すなわち書かれた内容だけでな

くその物質性が検討に値することが窺い知れる。エスノグラフィが記録や書物である以上、ほとんどの場合、その素材は紙である。いわゆるマルチモーダル・エスノグラフィ (Collins et.al. 2017) の進展により、映像、アート、パフォーマンスも同様にエスノグラフィのプロダクトの一つとなりつつあるが、歴史上プロダクトとなったエスノグラフィの大部分はパルプを原料とする紙でできており、印刷所や製本所を経て人々の手に渡ったものである。インゴルドが言うように、モノを作ったり使ったりする実践者は、物質の性質に従い、それと調和していく。作ることが「生の素材の内部にある実態に対して、あらかじめ考えてきた形式を押しつけるのではなく、生成する世界のなかで、素材に内在する潜勢力を引き出して力を算出」(インゴルド 2017:75) することであれば、エスノグラフィの物質性について自明視するのではなく、紙という側面について真剣に検討する必要があるだろう。

本論の事例から見れば、非常に単純に言えることの第一点目は、エスノグラフィが紙であることによってその場で誰かに手渡すことが可能となり、それを通じて贈与関係を即興で創り出し、他者との関係を構築することに繋がるという点である。このことは事例4に明らかなように、しばしば贈与物のような形で、フィールドに還元されるときに見いだされる。いわゆる社会調査実習などの人類学教育では、「教わった」ことへの返礼としてエスノグラフィが贈られ、それで関係が終わることもあるが、私たちと佐渡との関係は一つの成果を次のプロジェクトに繋げていくものであり、そこでエスノグラフィは新たな社会関係を生み出し、次の展開を生み出す源泉となったといえる。

第二点目は、電子ブックやオンラインジャーナルと異なり、紙は印刷製本が完了した時点で電気やデバイスを必要とせず、いわばインフラからある程度分離可能になっている点である。それゆえ、

事例1のように写真を印刷して持ち運んだり、図面や模型として永続的に展示できたりするが、このようなインフラから独立した紙の<sup>モビリティ</sup>移動性は、エスノグラフィにいつでも誰にでも容易にアクセスすることを可能にする。もし武蔵美生の精巧な図面がパソコンで特定URLにアクセスし、検索し、IDとパスワードでログインしなければ見ることのできないウェブ上のコンテンツであったとするならば佐渡の人々はそこから同様の啓発を受けていただろうか？また彼らが作った宿根木集落の模型が3Dデータで、Wi-Fiに接続されたVRゴーグルを被ってしか見ることのできないものだったとすれば、博物館来場者の何割がそこにアクセスするだろうか？もちろん今後はそれもありうるだろう。しかし、紙でできたエスノグラフィは、その成果を広めることにおいてだけでなく、エスノグラフィックなプロセスに人々を巻き込むのに非常に長けている。それは、紙がモノ単体としての独立性を持ち、ここにこそ、エスノグラフィのエイジェンシーの基盤があるからだと言える。

この点で参考になるのが、東アフリカ・ヌエル社会における国家と人々との関わりを紙の使用に注目して論じた橋本栄莉の論考である。橋本は、ヌエル社会において紙(でできた文書)は国家権力が国民の管理統制に用い、近代社会を生み出す装置になると同時に、人々の日常生活においては自身の独立性や反権力的な実践を獲得する媒介であったことを見いだす。特に南スーダン独立の投票において、独立派の人々が投票用紙に印刷された手のイラストを宗教的シンボルであるかのように読み込んでいく過程を分析することで、次のように述べる。

投票用紙のイラストや「紙」の上のシンボルは、クウォスによって保証されるヌエルの理念上の秩序が「紙」によって模倣されたものであった。この文脈において、ヌエルの人々は「紙」

を操作する主体ではない。あくまでもここでの主体は「紙」であり、ヌエルの人々は「紙」が模倣した秩序の顕現の目撃者、つまり対象なのである。(中略)住民投票の場面において観察されたのは、国家の成立のための「紙」の操作と運用は人間の主体的な行為であるが、その行為によって明らかになったことは、人間の主体性を越えたところに存在するクウォスの意志、あるいはそのクウォスの意志を成就させるという人間の主体的行為に隠された受動的な側面であった。この点において、「紙」は人間自らが主体となって操作する対象であるのみならず、他者と自己との関係を語り、受動的な存在としての人間のありようを表出させる部分的な主体である。自己の意志でありかつ他者からの啓示でもある、その双方の拡張物として「紙」は存在していた(橋本2019:91, 傍線筆者)。

ヌエル社会における紙は、国家権力の装置でもあり人々の独立のエイジェントでもあり、かつ、神の力(クウォス)がそこに象られたものでもある。ここにおいて紙は単なる客体としての印刷物ではなく、人間の行動や信念を動かし、社会を創り出していく主体としても捉えうる。おそらく紙としてのエスノグラフィがエイジェンシーを有し、人々の関係性を作り、書く者と書かれる者の双方に生成変化をもたらすのは、橋本が言うのと同様の性格がそこに見いだされるからである。私たちはエスノグラフィを、自分たちのプロジェクトの成果物としてみなしてきたが、同時に、エスノグラフィが私たちのプロジェクトを動かしてきた、とも言っていいだろう。ただし前述のように全ての紙のエスノグラフィが等しくそのような力を有しているわけではない。ヌエルの人々が分かりやすく特徴的な投票用紙のイラストにクウォスを見いだしたように、紙のエスノグラフィは、紙質、

製本方法、色合い、ページ数、重さ、判型、レイアウト、艶、写真や図版、フォント、余白など、触覚や視覚を通じて身体に直接働きかける物質性の有り様に左右される。とりわけアカデミックな場から離れれば、それらのことはエスノグラフィに書かれた内容と同等かそれ以上に、人々の変化をもたらす契機となるのである。

## V——結語

本論ではエスノグラフィが社会に対していかに働きかけるかという問題について、宮本常一らの民族誌的实践と、彼の遺産を素材に同様のプロジェクトを佐渡で行ってきた私たち自身の事例を通して、エスノグラフィが持つエイジェンシーを①未来予測、②物質性という2点に注目して検討してきた。ここまで見てきたように、エスノグラフィは外部からやってきた研究者や学生たちによって取り組まれ、描かれ、その内容だけでなく冊子や報告書といった物質的存在として地域社会やそこでのプロジェクトに影響を及ぼし、また、次の世代のエスノグラファーたちがそのプロジェクトに巻き込まれるなかで彼らの活動や生産物が生み出される。

自己と他者、フィールドと日常を往還するプロセスの中で紡ぎ出されるエスノグラフィは、私たちは調べ書く側と、彼ら＝書かれる側との双方に幾分かの変化をもたらす。インゴルドは人類学が他者ととともに学び、双方に生成変化と未来への道

筋の契機をもたらす学問だと述べたが、エスノグラフィを一連のプロセスのエイジェントとして捉えるならばそれと同じことが言えるだろう。エスノグラフィは、そこで描かれる人々にとって自己の生活環境の省察機会を得て、慣れ親しんだものを相対化する馴質異化(伊藤 2020:325)という形で変化をもたらす。実際その変化がどのようなものになるかは自明ではなく、エスノグラファーが予測したとしても、現実の出来事はそこから多くの場合ズレが生じていく。言いかえるとエスノグラフィを書く主体にとっても、エスノグラフィがもたらす社会への影響を完全に操作することは不可能である。

加えて、エスノグラフィ自体がエイジェンシーを有し人々に生成変化を与える以上、書き手もまた変化していかざるを得ない。本論後半の事例で述べたように、「ガイドブック」が引き金となって年配の人々が博物館活性化にむけて動き始めたことは、外部から研究としてそこに携わっていた私たちの立場性を再考させることになり、プロジェクトを構成するアクターの一つとして内在化されていく変化をもたらした。本論はその変化に対する自己省察の意味合いが強い。エスノグラフィはこのような偶発的な関係性やそこで生み出される知のエイジェントとなるものである。

### 【付記】

本論文にはJSPS 科研費21H00648, 21H00641の研究成果を含む。

## 注

1 当該の口頭報告は小西公大・門田岳久「予測＝期待をめぐるエスノグラフィの可能性と有限性：宮本常一写真プロジェクトの自己分析から」、日本文化人類学会第52回研究大会 分科会「エスノグラフィから未来を見る」、2018年6月2日。本論は当該発表での結論部を出発点とし、新規事例および門田(2019)で用いた事例を用い、全体的に稿を改めたものである。そのため本論事例において門田(2019)の記述と一部重

複していることを追記する。

2 ここでの生成変化の概念は、同じ存在の再生産を行う「あること」(being)と対比され、何らかの新たな変化をもたらす「生成変化」(becoming)というドゥルーズとガタリの概念(ドゥルーズ・ガタリ 1994:316)を想定していると思われる。しばしばインゴルドは、よく知られた「線」に関する考察などにおいてドゥルーズらの「生成変化の線」の概念に影響を受けたことを

- 明記しており(インゴルド 2021:205), 生を扱う人類学に生成変化の可能性を見いだす背景にも同様の観点があると思われる。
- 3 ここでいう「私たち」とは杉本浄(東海大学), 小西公大(東京学芸大学), 門田からなるプロジェクトであり, その全体像は小西(2018)を参照。
- 4 類例として「馬毛島に大牧場を 宮本常一を熱くした青年たちの夢とその後の現実」(朝日新聞, <https://www.asahi.com/>

- articles/ASPDJ6QZLPCSULZU00C.html, 2021年12月21日最終確認)。
- 5 筆者らの送付した報告書がテーブルで鍋敷きになっているのを見たこともある。判型の大きい報告書は土鍋を置くのに最適なのである。
- 6 相澤氏へのインタビュー(2021年12月)より。彼の佐渡の旅については相澤(2014)に詳しい。

## 文献

- ✧相澤韶男(2014)『美者たらんとす——壊さない建築家をめざして1943~70年』ゆいでく有限公司社。
- ✧Appadurai, Arjun(2013) *The Future As Cultural Fact: Essays on the Global Condition*, Verso.
- ✧Collins, Samuel Gerald, Matthew Durlington, and Harjant Gill (2017)“Multimodality: An Invitation.” *American Anthropologist* 119(1): 142-146.
- ✧ドゥルーズ, ジェル&フェリックス・ガタリ(1994)『千のプラトール——資本主義と分裂症』宇野邦一・田中敏彦・小沢秋広訳, 河出書房新社。
- ✧藤原香奈(2019)「歴史の変遷からみる宿根木の人と家のつながり」文化資源調査班編『南佐渡の文化資源—暮らしの変化を見つめて』生活文化研究フォーラム佐渡, pp.42-64.
- ✧グレーバー, デヴィッド(2017)『官僚制のユートピア——テクノロジー、構造的愚かさ、リベラリズムの鉄則』酒井隆史訳, 以文社。
- ✧Gunn, Wendy, Ton Otto and Rachel C. Smith eds. (2013) *Design Anthropology: Theory and Practice*, Routledge.
- ✧橋本栄莉(2019)「紙／神と国家——独立後南スウェーデン、スウェーデン社会における混成的政治秩序」『文化人類学』84(1):78-93.
- ✧池田光穂(2005)「民族誌のメイキングとリメイキング——ミッドがサモアで見いだしたもの」太田好信・浜本満編『メイキング文化人類学』世界思想社, pp.113-136.
- ✧インゴルド, ティム(2017)『メイキング——人類学・考古学・芸術・建築』金子遊・水野友美子・小林耕三訳, 左右社。
- ✧インゴルド, ティム(2020)『人類学とは何か』奥野克巳・宮崎幸子訳, 亜紀書房。
- ✧インゴルド, ティム(2021)『生きていること——動く、知る、記述する』柴田崇・野中哲士・佐古仁志・原島大輔・青山慶・柳澤田実訳, 左右社。
- ✧伊藤泰信(2015)「民族誌なしの民族誌的实践——産業界における非人類学的エスノグラフィの事例から」『九州人類学会報』42:17-21.
- ✧伊藤泰信(2020)「文化人類学の視点と方法論を実務に活かす」八巻恵子編『企業実践のエスノグラフィ』東方出版, pp.311-337.
- ✧加島卓(2019)「二つのデザイン・サーヴェイ——考現学以後の建築とプロダクト・デザイン」『現代思想』47(9):182-190.
- ✧門田岳久(2017)『「離島性」の克服——宮本常一と反転する開発思想』立教大学観光学部紀要』19:23-37.
- ✧門田岳久(2019)「関係性としての地域開発——佐渡の集落に見る伝統・街並み・再帰性」西川克之・岡本亮輔・奈良雅史編『フィールドから読み解く観光文化学——「体験」を「研究」にする16章』ミネルヴェ書房, pp.161-181.
- ✧門田岳久(2021)「オートモビリティと移動身体——宮本常一におけるフィールドワークの〈速度〉と拡張現実」山田義裕・岡本亮輔編『いま私たちをつなぐもの——拡張現実時代の観光とメディア』弘文堂, pp.128-148.
- ✧門田岳久・小西公大・杉本浄・鍋倉咲希編(2018)『宮本常一写真で読む佐渡② 観光以降』生活文化研究フォーラム佐渡。
- ✧門田岳久・小西公大(2018)「フォト・エリシテーションを用いた教育と社会実践——宮本常一写真を通じた佐渡の開発/観光史研究から」『立教大学観光学部紀要』20:40-53.
- ✧門田岳久・杉本浄(2013)「運動と開発——1970年代・南佐渡における民族博物館建設と宮本常一の社会的実践」『現代民俗学研究』5:33-49.
- ✧木村周平・内藤直樹・伊藤泰信(2019)「1.5次元エスノグラフィから見えるもの——『文化人類学する』ことについての協働的考察」『文化人類学研究』20:104-118.
- ✧小西公大(2018)「異種混交が生み出すフィールド教育の可能性——離島・廃校舎・ローカリティ」『社会と調査』20:84-89.
- ✧小西公大・吉村竜・戴寧編(2015)『非日常性とくつながり』の社会誌——佐渡・稲鯨集落における祭礼調査から』首都大学東京社会人類学分野。
- ✧真島俊一(1975)「小木半島の集落」新潟県佐渡郡小木町編『南佐渡の漁撈習俗——南佐渡漁撈習俗緊急調査報告書』小木町(=テム研究所『南佐渡の漁村と漁業』), pp.3-62.
- ✧真島俊一(1976)「間取りと生活」日本生活学会編『民具と生活——生活学論集1』ドメス出版, pp.57-106.
- ✧明治大学神代研究室・法政大学宮協ゼミナール編(2012)『復刻デザインサーヴェイ——『建築文化』誌再録』彰国社。
- ✧宮本常一(1993)『民俗学の旅』講談社。
- ✧宮本常一(2009a)『私の日本地図7 佐渡』未来社。
- ✧宮本常一(2009b)『宮本常一が撮った昭和の情景』上下巻, 毎日新聞社。
- ✧宮本常一(2014)『宮本常一講演選集4 郷土を見るまなざし』みずのわ出版。
- ✧日本観光文化研究所編(1989)『観文研——二十三年のあゆみ』近畿日本ツーリスト日本観光文化研究所。
- ✧日本観光文化研究所・宮本常一編(1975)『あるくみるきく』102
- ✧日本建築学会編(2018)『建築フィールドワークの系譜——先駆的研究室の方法論を探る』昭和堂。

- ❖ Riles, Annelise (2006) [Deadlines]: Removing the Brackets on Politics in Bureaucratic and Anthropological Analysis. In Annelise Riles ed. *Documents: Artifacts of Modern Knowledge*, University of Michigan Press, pp.71-92.
- ❖ 菅豊 (2013) 『新しい野の学問の時代』——知識生産と社会実践をつなぐために』岩波書店.
- ❖ 菅豊 (2018) 「フィールドワークの宿痾——公共民俗学者・宮本常一がフィールドに与えた「迷惑」」『社会人類学年報』44:1-27.
- ❖ 杉本尚次 (2002) 「野外民家博物館の100年——民家の生活復元展示をめぐって」日本生活学会編『生活学26 住まいの100年』ドメス出版, pp.296-320.
- ❖ 田村善次郎編 (2012) 『宮本常一日記 青春篇』付属CD, 毎日新聞社.
- ❖ 谷沢明 (1999) 「モノをとおしてみた住まいと居住形式(一)——宮本常一研究から」『民具研究』119:1-14.
- ❖ TEM 研究所編 (1993) 『宿根木の町並と民家 I』佐渡国小木民俗博物館.
- ❖ TEM 研究所編 (1994) 『宿根木の町並と民家 II』佐渡国小木民俗博物館.
- ❖ 土屋誠一 (2011) 「景観をめぐる時間と空間の政治学——宮本常一／写真／地図」『現代思想』2011年11月臨時増刊号, pp.222-229.

